

新たなる挑戦

私もこれに倣って縦横に歌を配置したものをつくろうと考えました。しかも各七行ずつでは碁盤らしくないと各十一行に挑戦する事にしましたのです。

歌の数は十四から二十二となり大体五割増し、しかし交点つまり文字が交差する碁盤の目の数が四十九から百二十一で倍以上となり、その分難しさは数倍になったと思われます。

しかもここでは現代文での仮名表記を用い、字余り字足らず清濁交換などもなく、従って拗音を含む語は避け、縦横に整地して縦は上から下、横は左から右と規則を守ること、と決めていたので実に苦労しました。

また使う歌もただの短歌ではなく青豆流の狂歌としました。つまりどの歌にも何らかの機知を詰め込み言語遊技的仕掛けを施すのです。

実際に掛詞を多用して重ね合わせを表現する歌、対となる語句や景を入れた歌、隠し題モノノナ的要素を意識した歌、字謎を入れた歌、故事や落語を踏まえる歌、回文など文字の並びが特殊な歌と様々に技巧を凝らしました。

結果として青豆流の集大成とも言えるような作品になったと思います。

かなんぎんでかみやほとけにうそついでだまくらかしてついにうまれた
 たなてこのいとさとかくこのなみちむじといざこれ
 ばつらのさばしめきりがおしずしのこのおりのなかのうきいだざ
 つかずむたきなりのおんばらなくばしがしるまなまるひとり
 かいなかねやはるはやねきこのごききばつなつばきひるまなまるひ
 うみはずはいはかすまいよでもいやえたさはあまうに
 よみやはんめがねもかすみあさがたがさあみすかもねがめんはやみよ
 うみはんめがねもかすみあさがたがさあみすかもねがめんはやみよ
 りんてんきつかわぬみらいたいあいななくきじもかずばうたれまいと
 あんなきつかわぬみらいたいあいななくきじもかずばうたれまいと
 のないさいてばみげんきえさるかひとめおくいまつめごまとうのま
 まじないさいてばみげんきえさるかひとめおくいまつめごまとうのま
 つせについでんげんきえさるかひとめおくいまつめごまとうのま
 つきのわやひぐまであえばひどいめをみるめのしたのくまもおそろ
 もるやひぐまであえばひどいめをみるめのしたのくまもおそろ
 へたるやひぐまであえばひどいめをみるめのしたのくまもおそろ
 こばなしたやことばをよせてさげるげんきさいおきにみいだすくふ
 よおしやことばをよせてさげるげんきさいおきにみいだすくふ
 もおしやことばをよせてさげるげんきさいおきにみいだすくふ
 てつづきもあしつづきだとおもわれるあまりにひどききたらいまわし
 たつかもあしつづきだとおもわれるあまりにひどききたらいまわし
 もつかもあしつづきだとおもわれるあまりにひどききたらいまわし
 ろうえいのわかくもなくてもれしこえしもるひみつはぬれしあしも
 ことうのわかくもなくてもれしこえしもるひみつはぬれしあしも
 かなづきあきもあいそもつきはててきもそがれつつぬけゆくはか

かなづき あきもあいそも つきはてて きもそがれつつ ぬけゆくはかみ

神無月 秋も愛想も 尽き果てて 気もそがれつつ 抜け行くは髪

旧暦の十月、神無月は秋が終わる月でした。「秋」と「飽き」、「尽き」と「月」、「気」と「季」、「髪」と「神」は掛詞になります。彼氏の髪の毛が薄くなったことに愛想づかしのカップルと、それを見て出雲に向かう縁結びの神様の気がそがれる様子を重ね合わせた歌です。

ろうえいの わかくもなくて もれしこえ しもるひみつは ぬれしあしもと

朗詠の 和歌句もなくて 漏れし声 しもる秘密は 濡れし足元

「朗詠」は「漏洩」に掛かり「秘密」と対になります。「朗」は「老」とも同音で「和歌句」が「若く」となって対です。「しもる」は湿る、湿気るの意味で、漏らしていたのが別な物だとわかります。

縁語が「シモ」「肥」「雲」です。

てつづきも あしつづきだと おもわれる あまりにひどき たらいまわしば

手続きも 足続きだと 思われる 剩りに非道き 盪回しば

何かの手続きに行ったならば、あっちで何とかを貰って来いとか、そっちで書類を揃えて来いとか、盪回しにされる。あまりにもあちらこちらに歩かされてこれじゃあ手続きじゃなくて足続きだよ、という歌です。

縁語は「足」「続き」「道」「回し」「ば=場」です。

こばなしや ことばをよせて さげるげい きさいおおいに みいだすくふう

小噺や 言葉を寄せて サゲる芸 奇才大いに 見いだす工夫

噺家を題とした狂歌です。私のやる狂歌も言語芸ではありますが、落語などはそれにも勝る芸です。語りの名人も名人ですが、創りの名人という場合もございます。ここで奇才と書いた「きさい」には、鬼才、機才、稀才、とあり微妙に意味が違うのですがどれでも良いと思います。

「小噺」「よせ＝寄席」「サゲ」「芸」が縁語になります。

つきのわや ひぐまであえば ひどいめを みるめのしたの くまもおそろし

月輪や 熊出会えば 酷い目を見る目の下の隈も恐ろし

私の出身である飛騨ではよく熊の出没がニュースになります。本州に多いのはツキノワグマ、北海道などにいるのがヒグマで、どちらにしても熊に出くわしてしまうと普通は対処のしようが無いものでこれは酷い目。酷い目と言えば徹夜明けなどで「酷い目」となることもありまして、そうしたときに出来る隈もまた恐ろしいなあという歌です。

まじないに さいごてんげん きえさるか ひとめおくいま つめごまっとう

呪いに 最後天元 消え去るか 一目置く今 詰め碁全う

天元とは碁盤の中央の目、星。これ実は一番最後につくって碁盤を埋めた歌です。そして縦の列の中央に位置します。マジナイの魔方陣のようにつくってきた碁盤の歌の天元が最後に埋まり喜んでいる歌です。

「詰め碁」は囲碁で部分的な石の生き死にをつくっていく問題のことで、狂歌として言葉を詰めていく作業「詰め語」に掛かっています。

「天元」とは北極星の事で元号としても使われました。貞元の後、永観の前。978年から983年までの期間でこの時代の天皇は円融天皇です。そして源順が碁盤の歌を発表したのもちょうど天元の頃です。ただし天元という囲碁用語が出来たのは江戸時代になってからです。

りんてんき つかわぬみらい たあいなく きじもかかずば うたれまいとね

輪転機 使わぬ未来 他愛なく 記事も書かずば 打たれまいとね

大手の新聞社などで紙の新聞の発行部数が減り代わりにWebのニュースサイトが隆盛だとか。ニュースサイトの中には自分で取材に行って記事を書くのではなくインターネットなどで情報を集めて加工しているだけと言うところも多いようでございますな。

下の句は「雉も鳴かずば撃たれまい」という諺と掛けてあり、さりげなく「らいたあ=W r i t e r」という隠し題があります。

よみやはん めがねもかすみ あさがたが さあみすかもね がめんはやみよ

読み夜半 眼鏡も霞み 朝方が さあミスかもね 画面は闇よ

夜中までネットで読み物などしていれば眼鏡をしても目がかすんでくる、それだから操作のミスでもしたのか画面が真っ暗になってしまった、そういう歌です。回文狂歌になっています。朝の明るんできた感じと真っ暗な画面とが対です。

かいないか ねやはるはやね きごのごき きばつなつばき ひるまなまるひ

甲斐無いか 寝屋春早寝 季語の誤記 奇抜な椿 昼間鈍る日

椿は字の通り春の季語です。でも夏椿という植物もありますし、寒さにも強いので変わった椿もあるかもしれません。これは五七五七七各句ごとの回文です。早寝しても春の陽気に寝過ぎてしまい甲斐がない、昼間からボンヤリとする、そんな長閑な歌です。

ばってらの さばしめきりが おしずしの このおりのなか のうきいざこざ

バッテラの 鯖締め切りが 押鮓の この折りの中 納期いざこざ

忙しい業界の人などは、ことごとに予定が押すとか巻くとか申します。駅弁などの寿司にもまた押したのとと巻いたのがあります。バッテラというのは関西の方ならご存じの通り締め鯖の押し寿司でこれが「締め切りが押す」に掛かってきます。鯖もまた、コンピュータの「サーバー」と掛かります。そして「この折りの中」の「折」も「時節」の意味と「折り詰め」の掛詞。バッテラというのは元々はポルトガルの小舟という意味だそうで押鮓の形が小舟に似ていたのでもう言われるようになったそうです。

なんざんで かみやほとけに うそついて だまくらかして ついにうまれた

難産で 神や仏に 嘘ついて だまくらかして ついに産まれた

「南無天照皇大神、南無塩釜大明神、南無水天宮、桑野平内濡仏、地藏菩薩観音さま。嬬アが安産いたしましたら、お礼に金無垢の鳥居一本ずつ納めます」これを聞いて、うなっているはずのかみさんも驚いた。この貧乏所帯、そんな鳥居なんとする。と言うと、熊五郎「俺が神仏騙している内に産んでしまいな」……

三遊亭圓生などが演じる落語『安産』的一幕です。いろんな落語のマクラで何度も聴いてたんですが題を知らなくてちょっと知り合いに調べて貰いました。

からころも たてもよこへも つじつまの ありあうように かきつばたかな

唐衣 縦も横へも 辻褃の あり合うように 杜若かな

伊勢物語にも書かれていることで有名な在原業平の詠んだ歌「唐衣 きつつなれにし つましあれば
はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ」古今和歌集の九巻に書かれています。この歌は折り句、つまりア
クロスティックになっておりまして各句の頭の文字を取り出すと「かきつはた」つまり「杜若」
という言葉になります。そのことからこの歌を踏まえて「唐衣 縫い目縫い目に 骨を折り」なんて
古川柳もございます。

辻褃というのは元々は裁縫用語で上下左右で布の縫い目が合わさる場所。それがしっかり合っ
ていると言うことは仕立てがきちり出来ていたということなので、物事の仕組みや話の筋道に矛
盾がないことを「辻褃が合う」と言うようになりました。

これは今回の二十二首の一番最初に詠んだ歌です。この歌は折り句では無いですが、碁盤の歌の
全体は縦横に辻褃合わせをしていく作品ですからそれを踏まえて詠んでみました。

この歌も業平の元歌と同様に「妻」と「褌」、「あり」と在原業平の「在」、「合う」と「
逢う」、「哉（かな）」と「仮名」などの掛詞が見いだせます。

また、「カキツバタ」という言葉も「書きつ」と「機＝ハタ（鶴が布を織るのに使うやつ）」い
う言葉の組み合わせになっており、機織りが縦糸に横糸を通して布にするように文字を縦横に書
き付けて創るこの作品に相応しい言葉であって、綺麗に纏まったなと思っております。

づだといひ かきなおしたる わがせいの なんてんはずの いたずらなてん

‘づ’だと言ひ 書き直したる 我が姓の 難点はずの 悪戯な点

いきなり文頭が‘づ’で困りました。現代の日本語では文頭が‘づ’になることなど殆どあり得ないからです。そこで変則的な歌を作りました。

実は私の本名は「板津」で仮名で表記するなら「いたづ」なのですが、人によっては、あるいは機械によっては「いたず」と表記してしまうことがあります。

それを「いたずら」と隠し題っぽくしつつ、濁点の点と、難点の点とを掛けて詠んだ歌です。

きにかかる いしのことばに ぐらついて ばかなわがはい やむたばこのみ

気に掛かる 医師の言葉に ぐらついて 馬鹿な我が輩 病む煙草飲み

「我が輩」と「我が肺」を掛けただけの単純な狂歌です。

実際の私は一切煙草は吸いません。それどころか漂う煙も発作を引き起こす可能性があり見つけ次第嗅ぎつけ次第逃げています。

「(気に) かかる」と「(医者に) かかる」、「医師」と「意志」、「病む」と「止む」などが掛詞となり、「肺」と「灰」、「言葉」と「(煙草の) 葉」などが煙草の縁語となります。

いこいなく なきつきよるよ あのあんみ なみかぜかはや はきなきといと

憩い無く 泣き付きよるよ あの案見 波風かはや 覇気無き問いと

実はこれもまた形の狂歌で、中央の‘ん’を挟んですべて交点に有る文字を繰り返すようになっています。

「いこい なくな きつき よるよ あのあ ん みなみ かぜか はやは きなき といと」と区切れればお分かり頂けるのではないのでしょうか。

「依る」と「寄る」、「案」と「暗」、「覇気」と「破棄」、「問い」と「訪い」が掛詞あるいは縁語となります。

つくるもの なおてんさいは ひたむきに ひたすらあまい きびのおさとう

作る物 なお天才は 直向きに 只管甘い 機微のお砂糖

お砂糖は甜菜あるいはサトウキビからつくられます。それを「天才」と「機微」とに合わせた狂歌です。「ひたむき」と「ひたすら」で「剥く」と「搗る」という砂糖を作る行程を通わせたつもりですがあまりうまく掛かっていません。

てんのこえ われてんげんに めをはるみ みなよこたてよ ごばんしかくい

天の声 我天元に 目を張る身 皆横縦よ 碁盤四角い

これも中央を通る歌なので「天元」を詠んでいます。天元という言葉を作ったのは一世安井算哲の子で渋川春海という人物、この歌にも「はるみ」と隠し題で入れました。

ももすもも やまなしさくら るいはとも あじはぺあでも ばらかのなかま

桃、李 山梨、桜 類は友 味はペアでも バラ科の仲間

桃や李、山梨、桜、洋梨どれもバラ科の植物です。他にも梅や杏、花梨、苺などもバラ科（ヤマモモやコケモモのように桃と付くけどバラ科でないものもあります）です。「ペア（対）」と「バラ（散）」が対になります。

れんがみち みひたちおきな しのくはつかずとかいや つくばのみちか

連歌道 御火焼翁 下の句は 付かずとかいや 筑波の道か

連歌の芸道を「筑波の道」と称します。古事記に見える下記のような記述を連歌の始まりとしたからです。

即ち其の國（常陸の國）より越えて甲斐に出でまして酒折宮に坐しし時 歌曰ひしく「新治筑波を過ぎて 幾夜か寝つる」とうたひたまひき 爾に其の御火焼の老人（みひたちのおきな）御歌に續ぎて歌曰ひしく 「日々並べて 夜には九夜 日には十日を」とうたひき 是を以ちて其の老人を誉めて即ち東の國造を給ひき

この狂歌はこの故事を踏まえ「付く、付かない」と「筑波」との音を重ねたものです。

ぬれぎぬを きたみなみだか くにしつつ ほうをたがえた ひがしのむじつ

濡れ衣を 着た身涙か 苦ししつつ 法を違えた 非が氏の無実

「きた」、「みなみ」、「にし」、「ひがし」を隠し題で詠み込みとし「法」を「方」に通わせた狂歌です。

「法」と「方」の他、「着た」と「来た」、「苦し」「句に」「国」、「違えた」と「他が得た」、「非が」と「彼我」、「氏」と「死」あたりが掛詞や縁語として働きます。

くいずあり つまはにすいを おくさまの いまのじはさあ なんだいという

悔いずあり 妻は二水をおく様の今の字はさあ なんだいと言う

「ㄣ（二水の扁）」は三水（さんずい）が流れる水であるのに対して凍った水を表すそうです。冷、凍、凝の他冬や寒の下に付く二点も元は二水だそうです。

「氷の字 水に一点 増えている 扁とするとき その点が減る」
妻という字に二水を付けると「凄」になります。「すごい」とも読めますが「すさまじい」と読んだ方が冷たさをより強く感じますね。

「悔いずあり」は「クイズあり」、「置く様」と「奥様」、「字」と「地」、「なんだい」と「難題」が掛詞です。

みなもとの ごぼんのうたに したごうの まねごのように ひとりざれうた

源の 碁盤の歌に 順の マネ碁のように 独り戯れ歌

囲碁の対局時、相手の打ち方を真似て天元に対して対称の位置に打っていくことをマネ碁と言います。

碁盤の歌の作者である「源順」がオリジナルの意味での「源」、順守する意味での「順」とも重なることを踏まえて詠んだ狂歌で、この作品全体では二番目ぐらいに作った歌です。

「皆」と「独り」が対となります。

青豆流狂歌実作・碁盤の歌

<http://p.booklog.jp/book/28784>

著者 : aomura10106

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/aomura10106/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/28784>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/28784>